



天界の狂戦士

川又千秋

双葉社

(9/10刊・¥600)

かつて、『SFマガジン』に連載されたエッセイ「夢の言葉・言葉の夢」や、初期作から、ある程度、著者の作風は予想された。それは既刊の『反在士の鏡』に、一部窺える。けれども、それらの多くは未完の状態だ。一方、意外に思われたのが、一連の冒険小説で、本書もその一冊である。いろいろな人の言う、「意外な」というのは、そこに込められた、重要な(と思われた)「夢」に象徴される要素が、希薄だった点を指すのだろう。

だが、読み手の判断である評論と、書き手の小説とは違う。しかも、作家によっては、しばしば、その理論が作品の足枷あしかぎとなるところを見ると、評論と作品の相違は、むしろ望ましいのかもしれない。理論と創作を両立させ、実践している作家は、せいぜいレムぐらいいだ。

核戦争後の地球、月に逃れたかつての支配者たちに、左腕と妻を奪われた主人公は、すさまじい復讐心を抱き、遂に月へと侵入する。たしかに、小道具や設定など、至るところ

に夢のイメージはある。しかし、何よりも本書は、リアルな冒険小説であり、素直に読みたい作品だろうと思う。

(俊)